

平安京左京一条四坊九町跡

2006年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安京左京一条四坊九町跡

2006年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生きています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は、今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来1200年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じ広く公開することで、市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用を図っていきたいと願っています。

研究所では、平成13年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ規模の違いはありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび事務棟整備工事に伴う平安京跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げます。

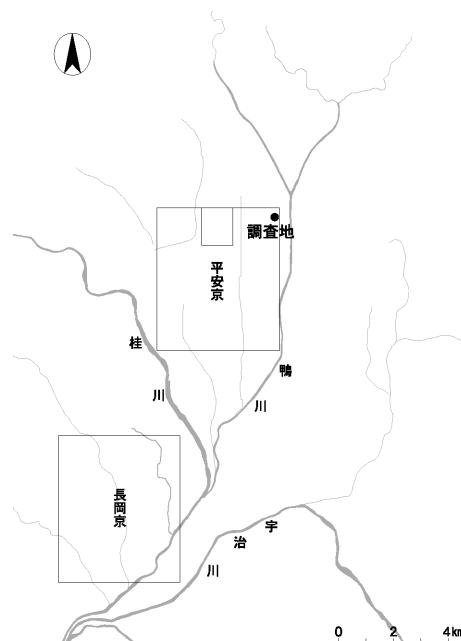
平成18年3月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 平安京左京一条四坊九町跡・公家町遺跡
- 2 調査所在地 京都市上京区京都御苑（京都大宮御所内）
- 3 委 託 者 分任支出負担行為担当官 宮内庁京都事務所長 下 均
- 4 調査期間 2006年1月6日～2006年1月23日
- 5 調査面積 200m²
- 6 調査担当者 木下保明
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「御所」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 日本測地系（改正前）平面直角座標系（ただし、単位(m)を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用基準点 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点（一級基準点）を使用した。
- 11 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 12 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 13 遺物番号 挿図順に通し番号を付し、写真の番号も同一とした。
- 14 掲載写真 村井伸也・幸明綾子
- 15 基準点測量 宮原健吾
- 16 本書作成 木下保明
- 17 編集・調整 児玉光世
- 18 本書は、2001年度から発刊してきた『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報』を、今年度より書名変更したものである。



(調査地点図)

目 次

1 . 調査経過	1
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 調査の経過	2
2 . 位置と環境	2
3 . 遺 構	3
(1) 基本層序	3
(2) 遺 構	4
4 . 遺 物	7
(1) 遺物の概要	7
(2) 土器類	7
(3) 瓦 類	11
(4) その他の遺物	11
5 . ま と め	12

図 版 目 次

図版 1	遺構	1	1 区全景 (北から)
		2	1 区北壁断面 (南西から)
図版 2	遺構	1	2 区全景 (東から)
		2	2 区土壌 2 遺物出土状況 (西から)
図版 3	遺物		出土土器

挿 図 目 次

図 1	調査位置図および周辺調査 (1 : 2,500)	1
図 2	調査区配置図 (1 : 500)	2
図 3	調査前全景 (北から)	3
図 4	調査風景	3

図5	1区北壁・2区北壁断面図(1:50)	4
図6	調査区平面図(1:200)	5
図7	2区平面図(1:40)	6
図8	立会地点土層柱状図(1:200)	7
図9	土器実測図(1:4)	9
図10	土器および棟丸瓦拓影・実測図(1:4)	10
図11	その他の遺物拓影・実測図(1:4、85・86は1:1)	11
図12	その他の遺物	11
図13	硯	11

表 目 次

表1	周辺調査一覧表	3
表2	遺構概要表	4
表3	遺物概要表	8

平安京左京一条四坊九町跡

1. 調査経過

(1) 調査に至る経緯

調査地は、京都市上京区京都御苑内の京都大宮御所の敷地内である。この調査は、京都大宮御所（事務棟）整備工事に伴う埋蔵文化財調査業務である。調査地は平安京左京一条四坊九町（鷹司小路を含む）また、江戸時代初めに南に隣接する仙洞御所とともに造営された大宮御所（女院御所）にあっている。そのため、工事に先立って遺構の残存状況を確認するために試掘調査を

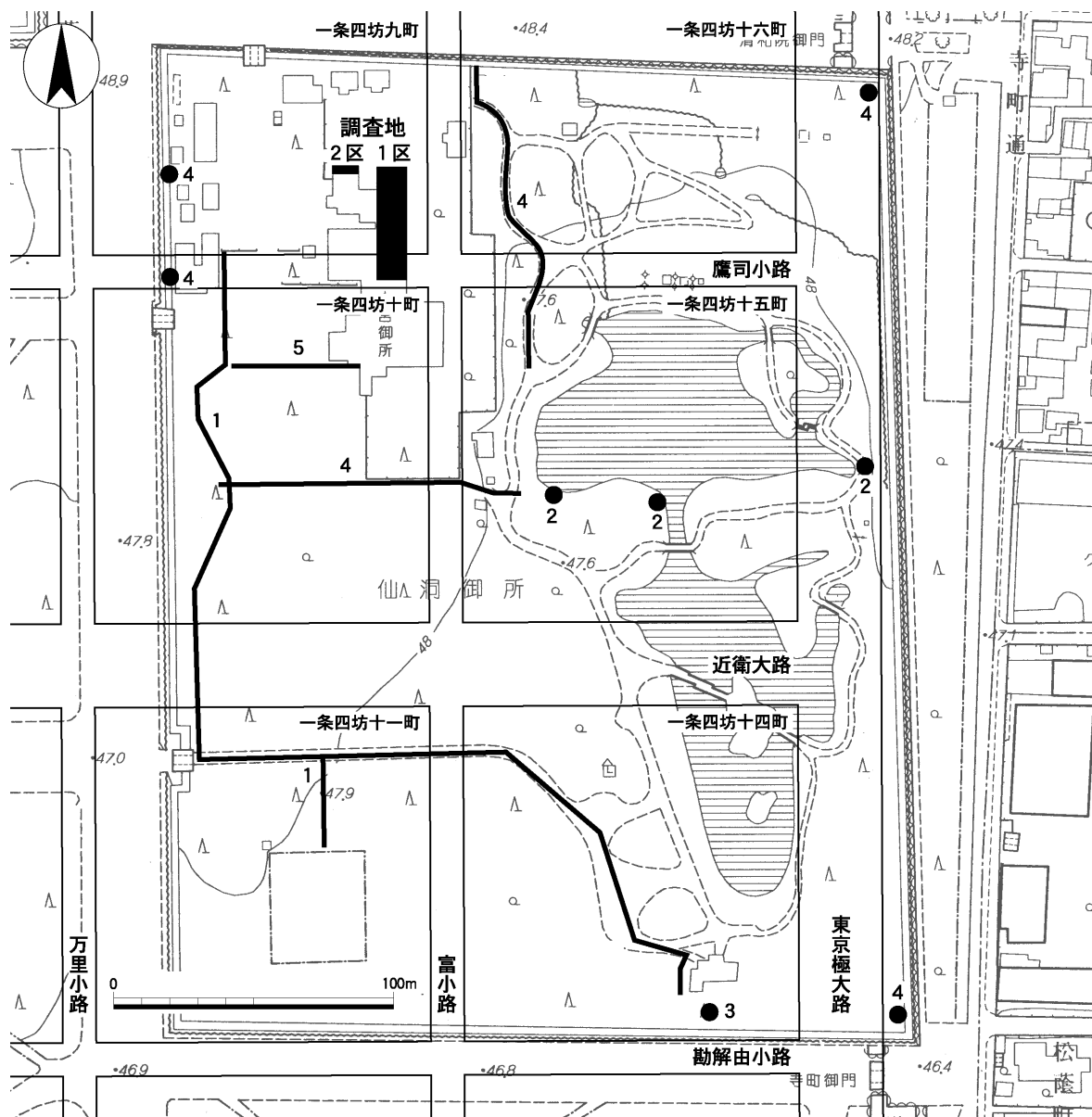


図1 調査位置図および周辺調査 (1 : 2,500)

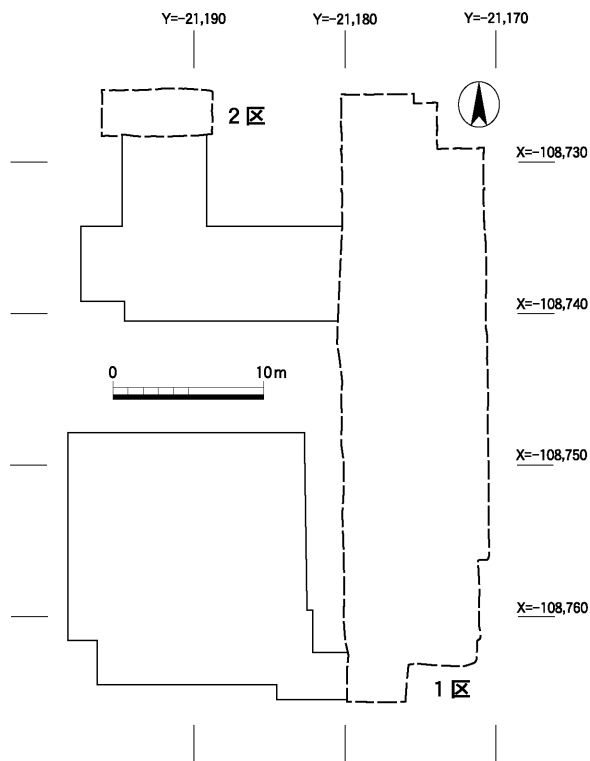


図2 調査区配置図(1:500)

実施し、江戸時代の遺物包含層や焼土を検出した。そのため、京都市埋蔵文化財調査センターの指導のもとに発掘調査を実施することになった。調査は、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が委託を受け実施した。

(2) 調査の経過

今回の調査は、既存の建物(大正時代に創建)の保存・活用が図られるため、壁や床などを取り除いた建物の骨組みを地上1.5mまで持ち上げた状態での調査となった。建物は南北に長い母屋棟と、母屋棟の北辺の西側に「L」字形に付属する玄関棟から成り立っている。調査は、主に母屋棟(1区)を対象に実施したが、遺構の残存状況が良好であった玄関棟(2区)の一部でも行った。調査は、

地盤改良を施す深度(G.L. - 0.1 ~ - 0.3m)に従って機械掘削を実施した後に、遺構検出を実施した。また、既設管の撤去に伴う立会調査を実施した。

遺物は、建物内の部屋割りに応じて仮番号を付して取り上げた。平面図の作成はオルソ測量を実施した。

調査は、平成18年1月6日にスーパーハウスなどの器材を搬入、発掘調査を1月10日から開始し、同20日に終了、同23日に器材を撤去し終了した。

2. 位置と環境

調査地は、平安京の北東隅の平安京左京一条四坊九町に該当し、平安時代後期、藤原道長の妻・源倫子の邸宅である「鷹司殿」の推定地にあたる。また、東隣には藤原道長の邸宅である「土御門殿」が存在した。平安時代から室町時代にかけて、当地は公家・武家の邸宅地として存続した。

江戸時代の初め、後水尾天皇の譲位後の居所として仙洞御所が建設された。同時に仙洞御所の北西に、大宮御所が東福門院(後水尾天皇の中宮)の女院御所として、寛永四年(1627)から七年にかけて、小堀遠州を作事奉行として造営された。造営後、寛永十三年(1636)、延宝四年(1676)、貞享元年(1684)、宝永五年(1708)、天明八年(1788)、嘉永七年(1854)に罹災している。

現在の大宮御所の建物は、英照皇太后(孝明天皇の女御)のために慶応三年(1867)に造営さ

表1 周辺調査一覧表

番号	調査期間	方法	調査概要	文献 (発行:京都市文化市民局)
1	1999.7.15 ～8.24	立会	近世の東西溝・石組南北溝を検出	『京都市内遺跡立会調査概報 平成11年度』 2000年
2	2000.1.25 ～3.7	立会	GL-30cmで近世の包含層、GL-50cmで平安～ 鎌倉時代の包含層を検出	『京都市内遺跡立会調査概報 平成12年度』 2001年
3	2001.1.16	立会	GL-35cmまで現代盛土	『京都市内遺跡立会調査概報 平成13年度』 2002年
4	2001.3.6 ～4.10	立会	江戸時代末期・中期の焼土層、江戸時代前期の 流れ堆積を検出	『京都市内遺跡立会調査概報 平成13年度』 2002年
5	2001.9.17 ～9.25	立会	GL-20cmで焼土を含む整地層を検出	『京都市内遺跡立会調査概報 平成13年度』 2002年

れたものである。また、大宮御所の北側、京都御所の東側には公家町が形成されていた。

なお、今回の調査の対象となった事務棟は、大正時代に建てられたものである。

仙洞・大宮御所内では、今までに5度にわたって立会調査を実施しており、平安時代から鎌倉時代の包含層、江戸時代前期の流れ堆積、江戸時代の溝などが検出されている。また、1998～2001年に実施した、京都迎賓館建設に伴う調査によって、古墳時代から江戸時代（公家町）の遺構・遺物が多数検出されている。

3. 遺 構

(1) 基本層序 (図5、図版2-2)

基本層序は、1区では、表土下約0.2mまでが盛土で、以下近代の整地層である10YR3/2（黒褐色）砂質土が0.2m、2.5Y3/2（暗オリーブ褐色）砂質土が0.15m、2.5YR4/6（赤褐色）粘質土（焼土層）が0.1m、江戸時代の整地層と考えられる2.5Y4/4（オリーブ褐色）粘土が0.1m、暗オリーブ褐色砂礫が0.2m堆積している。焼土層は、火災後の整理層と考えられる。焼土層から土器類の出土はなく、瓦類が比較的多く出土している地点がある。最下層の2.5Y3/3（暗オリーブ褐色）砂礫には遺物が含まれず、時期は不明である。また一部では、10YR3/2（黒褐色）砂質



図3 調査前全景（北から）



図4 調査風景

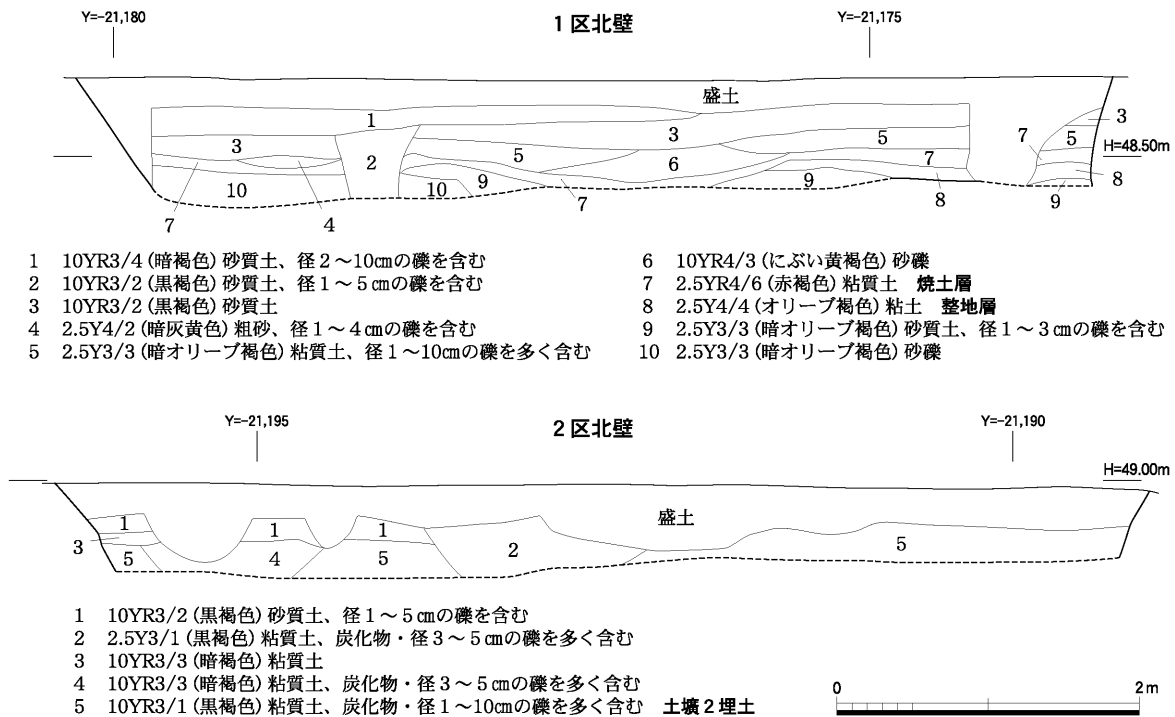


図5 1区北壁・2区北壁断面図(1:50)

土と2.5Y3/2 (暗オリーブ褐色) 砂質土との間に焼土層の堆積が見られる地点がある。

2区の基本層序は、地表下0.2~0.3mが盛土で、次に10YR3/2 (黒褐色) 砂質土が0.1~0.15m堆積し、2.5Y3/3 (暗オリーブ褐色) 砂礫となる。

(2) 遺構 (図6~8、図版1・2-1・3)

1区では、盛土あるいは近代の整地層の掘削にとどまり、遺構は検出できなかった。南部で、漆喰の堆積が認められたが、二次堆積層で構築物ではない。また、北壁沿いに設置した確認トレンチの土層観察・既設管撤去時の立会で、整地層と土壌1を確認している。遺構面が比較的浅かった2区北部で、大型の土壌2 (廃棄土壌) を検出した。

土壌1 既設管撤去時の立会調査の際に、1区の南半の東壁 (立会a地点) で検出した土壌である。地表下約0.7mで、2.5Y3/3 (暗オリーブ褐色) 砂礫を切って成立している。埋土は2.5Y3/1 (黒褐色) 粘質土で、赤貝・蜆などの貝殻とともに肥前磁器の京焼の椀、白磁の小型椀、土師器の皿などが出土している。上部を2.5YR4/6 (赤褐色) 粘質土 (焼土層) が約10cmの厚さで覆っている。

土壌2 2区で検出した土壌である。南側掘形のみでの検出であるが、東西7m以上、南北3m以上の規模をもち、完形の土師器・皿を含む多量の江戸時代の遺物が出土している。他に貝殻や

表2 遺構概要表

時代	主な遺構	備考
江戸時代中期	土壌1・2、整地層	廃棄土壌

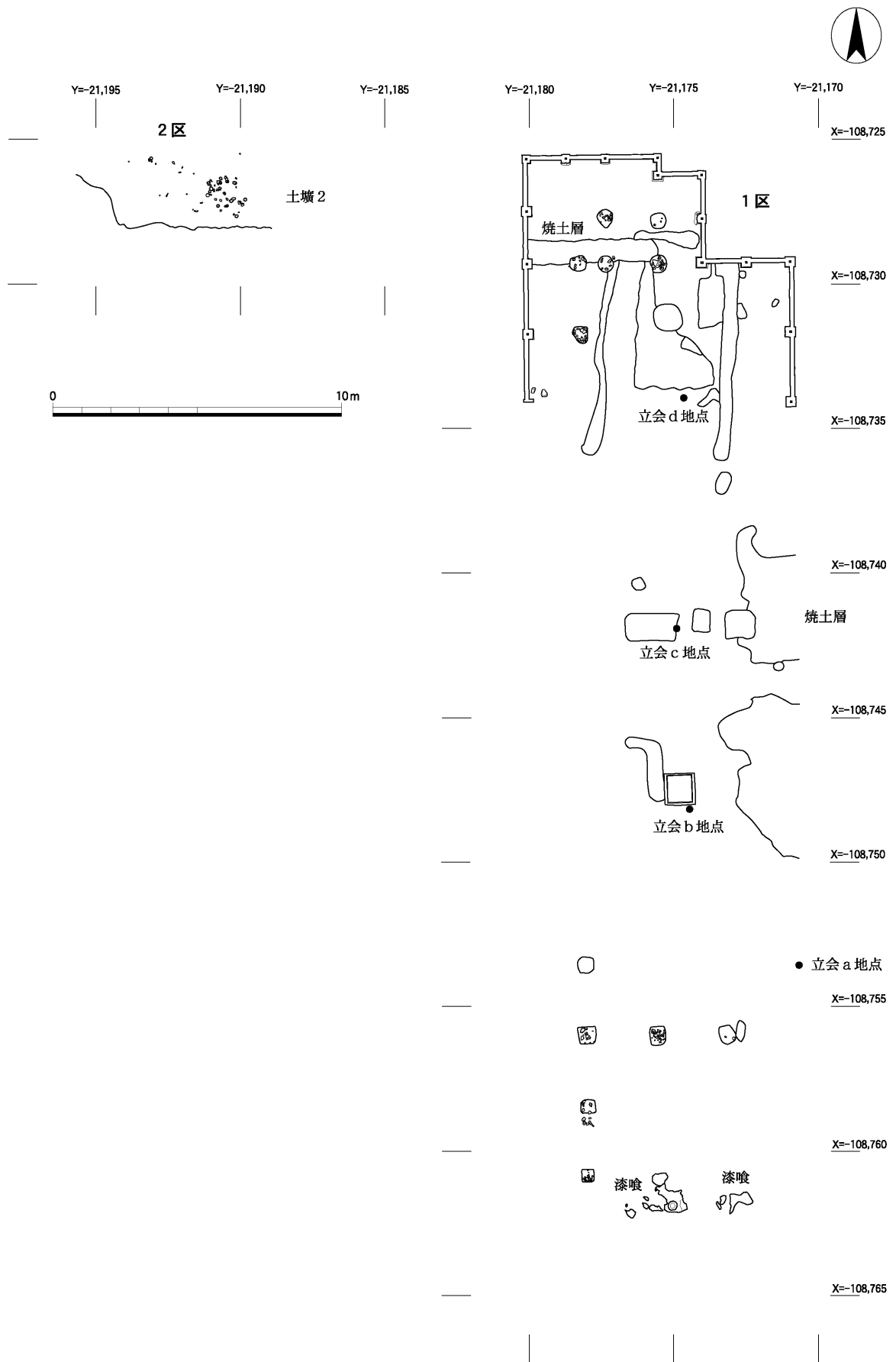


図6 調査区平面図(1:200)



X=-108,726

X=-108,728

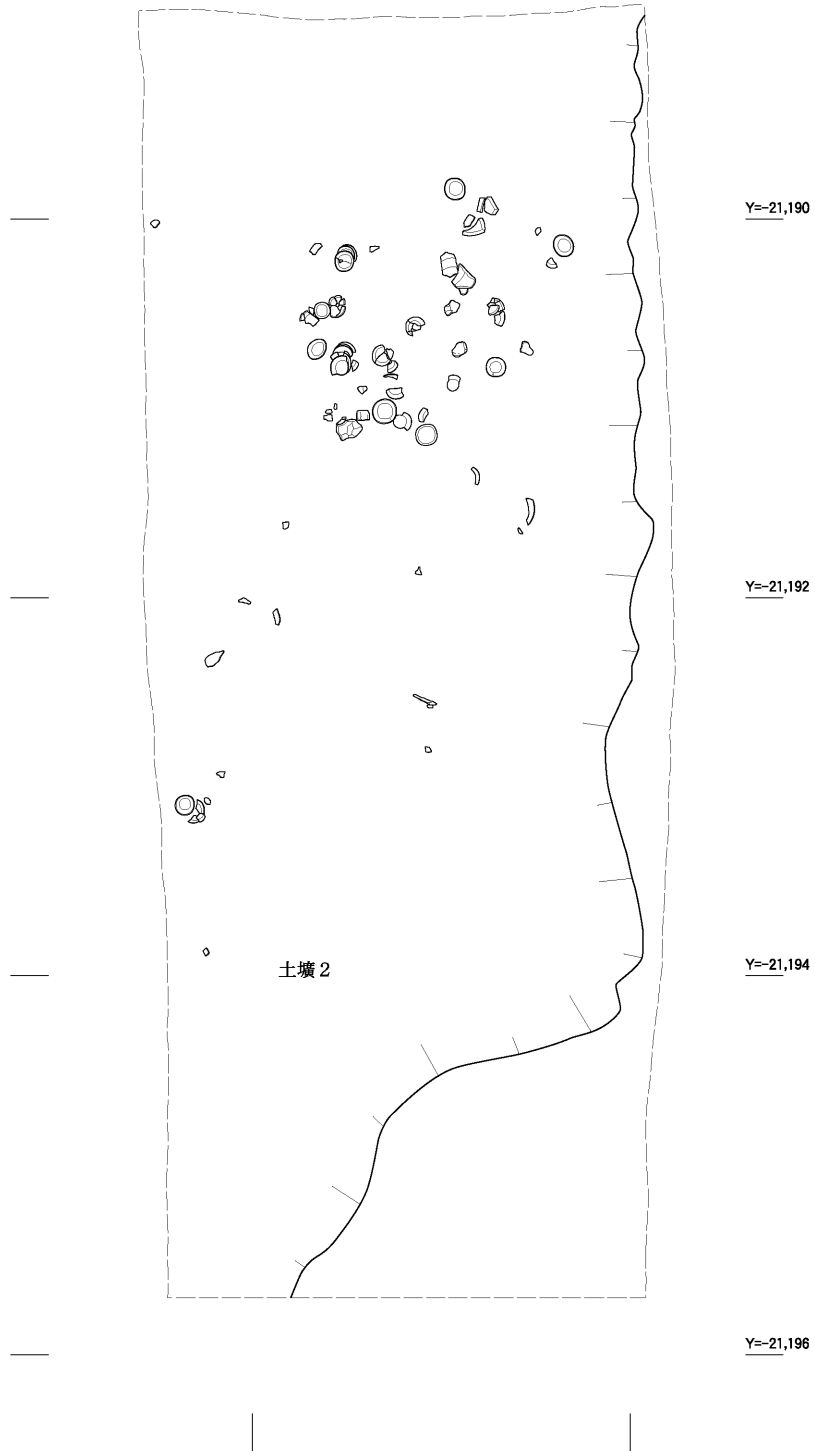


图7 2区平面图(1:40)

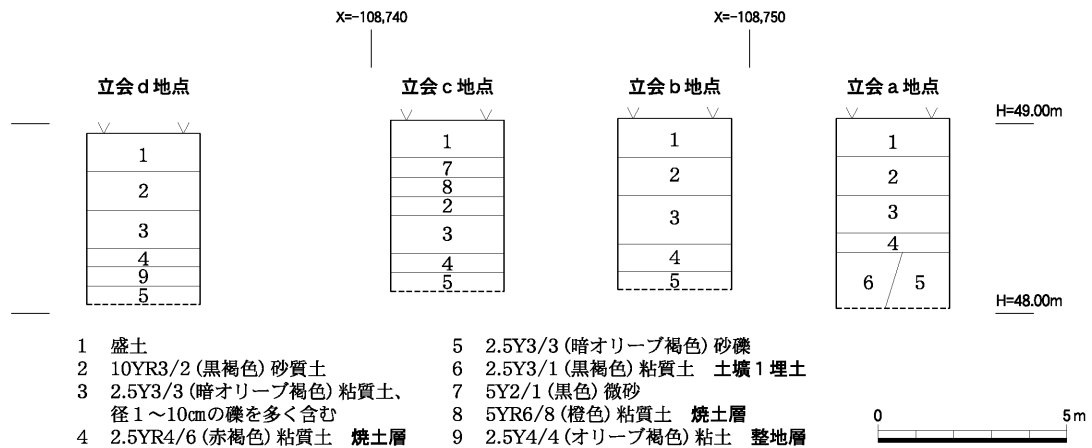


図8 立会地点土層柱状図 (1 : 200)

魚類の骨が出土している。底部を確認していないので深さは不明である。埋土は10YR3/1 (黒褐色) 粘質土である2.5Y3/3 (暗オリーブ褐色) 砂礫を掘り込んで、形成されている

整地層 断面の観察から、Y=-21,178.40以東、X=-108,734 (立会 d 地点) 以北の1区の北東隅のみに分布していることを確認した。地表下約65cm (標高58.45m) で検出した。2.5Y4/4 (オリーブ褐色) 粘土を厚さ10cmを貼り付けて整地したものである。上部を厚さ約10cmの焼土層が覆っている。江戸時代の整地層と思われるが、遺物は出土せず時期は不明である。この整地層から成立している遺構は検出していない。

4 . 遺 物

(1) 遺物の概要

遺物の大半が、2区の土壌2 (廃棄土壌) から出土したものである。土師器の皿がその9割を占め、完形品も比較的多い。肥前磁器の椀・皿・蓋・仏飯器、京焼系陶器の椀・急須・筒形・鬚水入れ、瀬戸・美濃系の鉄釉の鍋・褐釉の壺、信楽の擂鉢、堺・明石系の擂鉢、焼塩壺、土師質の炮烙・風炉・蓋、土製人形、銭貨 (寛永通寶)、銅製品 (環頭鋏、紐金具)、鉄製品 (釘)、骨製品、石製硯などがある。また、動物遺存体としてテングニシ、アカガイ、シジミガイ、ハマグリ、アワビの貝殻、魚類のタイ科、シイラの椎骨が出土している。

(2) 土器類 (図9・10、図版3)

1~27は肥前磁器である。1・2は白磁で、1は端反り椀、2は口縁端部にサビ釉を施したいわゆる「口紅椀」である。3~5は、草花文の小型椀である。6は雨降文の粗製の仏飯器である。7~11は高台の内面に二重角「福」銘をもつ椀である。7は花唐草、8は花唐草の間に雪輪、9は松竹梅、10は桐、11は水仙を描いている。12~14は高台の内面に「大明年製」銘をもつ椀である。12は粗製の椀で梅花に八ッ橋、13は松、14は菊花を描く。15~19は高台内無銘の椀である。15

～17は禁裏注文品で、15は菊花に斜格子、16は3段重ねの菊花、上段に菊花の間に唐草下段に亀甲を描く。18は枇杷、19は氷裂文と草花を描く。20～25は皿である。20・21は粗製の皿で、20は見込み蛇ノ目釉剥、21は梅樹を描く。22は高台内に「大明成化年製」の銘をもち内面に松、23は橙を描く。24・25は禁裏注文品で、24は菊花の菱文つなぎ、25は菊花に亀甲を描く。どちらも外面に梅花繫で24は通常のものに比べて若干変形している。26・27は蓋である。26は禁裏注文品で、菊花に菱文繫、27は丸菱に唐草繫である。

28～31・33～37は京焼陶器である。28は小型の急須で表面に細かい貫入がはいる。29は灰吹き、30・31は、筒形容器で外面に上絵を描くが、30は上絵が剥落して痕跡をとどめるのみである。33は禁裏注文品の平椀で、高台の内面まで施釉されている。34は錆絵染付の松を描く。35・36は丸椀で、35は上絵の注連縄文、36は金彩で上絵を描く。37は白化粧錆絵の半筒椀である。

32は肥前陶器の刷毛目文の椀である。

38～55は土師器の皿である。44～52・55は底部から丸味を帯びて体部・口縁部へ伸び、内底面に圏線をもつ。口径が12cm・10cm・8cm前後の3種の大きさのものがある。器高は1.6～2.5cmである。53・54は外形は前者と同様であるが内面に圏線をもたないものである。口径8.5～8.6cm、器高1.8～1.9cmである。41～43は底部の中央が若干内側に突出するもので、口径が約8.5cm、口径は約5cmの2種がある。器高は1.4～1.6cmである。43は、焼成後に底部中央に孔が穿たれている。38・39は小型の手捏ねのものである。口径5.2～5.4cm、器高1.2～1.3cmである。

56は土師器の小型の鉢で、いわゆる「でんぼ」とよばれる。口径5.5cm、器高2.5cmである。

57～60は皿の底部にツマミをつけた形態の蓋である。口径が20cmを越える大型のもの(60)以下13cm(59)・11cm(58)・9.5cm前後の蓋(57)がある。ツマミの残った59の器高は2.65cmである。

61～68は土師質土器である。66・67は京都産の焼塩壺、61～63は京都産の焼塩壺の蓋である。64・65は堺系の焼塩壺の蓋である。68は火入れ壺である。

69は備前陶器の灯明皿である。

70は瀬戸・美濃系の褐釉陶器の双耳壺である。

71～73は京・信楽系の鉄釉陶器である。71・72は鍋、73は爛鍋である。

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代	輸入白磁、須恵器				
江戸時代中期	土師器、土師質土器、土製品、磁器、陶器、銅製品、鉄製品、骨製品、石製品、銭貨、棟丸瓦、瓦		土師器23点、土師質土器8点、磁器27点、陶器16点、銅製品3点、鉄製品2点、骨製品1点、石製品1点、銭貨2点、棟丸瓦3点		
合計		26箱	86点(4箱)	10箱	12箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より4箱多くなっている。



图9 土器实测图(1:4)

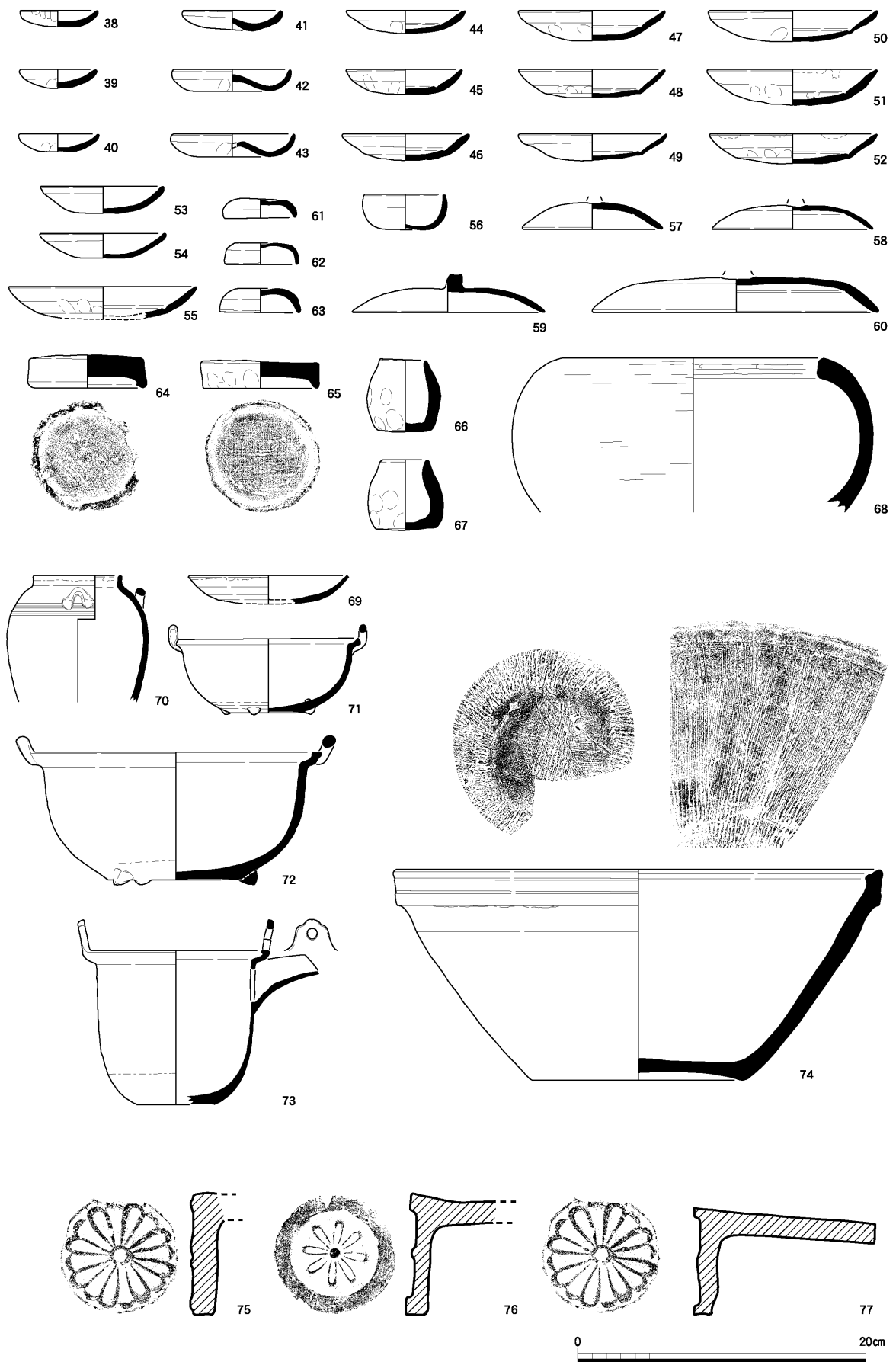


図10 土器および棟丸瓦拓影・実測図（1：4）

74は堺・明石系播鉢である。

1・55は1区の土壌1から出土、他は2区の土壌2から出土した。18世紀の第3四半期を中心とした土器群と思われる。

(3) 瓦類 (図10)

出土した瓦類には、平瓦・丸瓦・軒丸(巴文)・棟丸瓦である。図示したのは棟丸瓦3点である。76・77は、瓦当は周縁を有し、粒状中房・凹弁八葉一重菊の菊花文を施す。瓦当面にキラコがみられる。外縁下半はナデで、さし部両側縁のナデに連続する。瓦当裏面はナデ+裏縁ナデを施す。さし部裏外面はタテナデ、裏面は不調整である。75は周縁のない瓦当で、環状中房・凹弁十六葉一重菊の菊花文を施す。外縁下半はナデで、さし部両側縁のナデに連続する。瓦当裏面はナデ+裏縁ナデを施す。

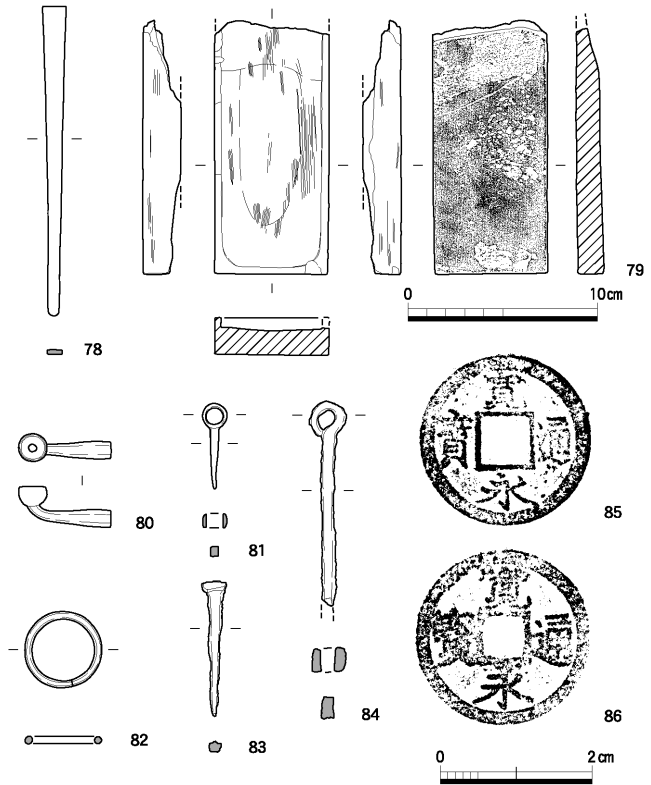


図11 その他の遺物拓影・実測図(1:4、85・86は1:1)

(4) その他の遺物 (図11~13)

78は骨製の筧状製品である。長さ16.3cm、厚さ1.5mmの偏平な板状で、一端を幅広に端部は直線的に截断し、もう一端は細くなって丸味をおびる。髪飾りもしくは髪結び用のものと思われる。

79は長方形の滋賀県高島産の虎斑石で作られた硯である。海部の縁を欠き、丘に擦込による浅い凹みがある。硯背に「本高嶋石」の釘書銘がある。

80は真鍮製の煙管の雁首である。重さは8.5gである。

81は頭部が環状で先端が尖る、銅製の環状鋏である。頭部と頭部から約1cmの所まで鍍金が施してある。長さ4.3cm、頭部の径1.1cm、重さは6.4gである。

82は断面が円形の銅製の針金を折り曲げて径4cmの環状に成形した金具である。重さは10.0gである。

83は鍛造の鉄製の釘である。叩いて延ばした不定形の頭

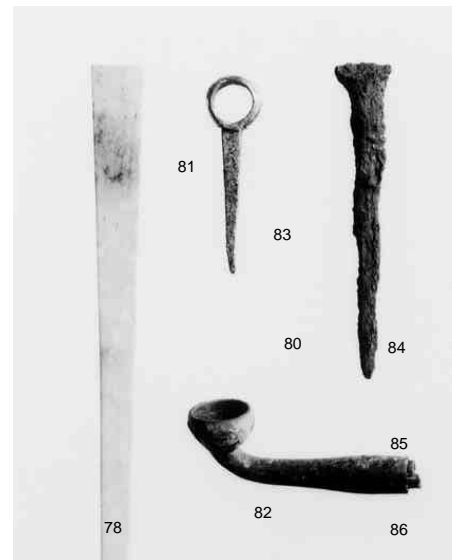


図12 その他の遺物

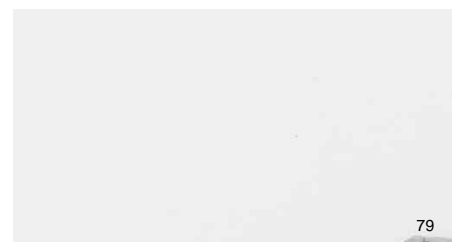


図13 硯

部から断面方形の棒状が延びる。長さは7.1cm、重さは7.6gである。

84は板状金具の一端を叩き延ばして環状にしたものである。他端は失われている。釘の一種だと思われる。現存長10.6cm、重さ30.6gである。

その他、寛永通寶が2点(85・86)出土している。

5.まとめ

今回の調査では、掘削深度に制限があったため、調査区の大半が遺構面に達しなかった。しかし、江戸時代の土壌(廃棄土壌)を2基検出し、多くの遺物を採取することができた。出土した遺物は、18世紀の第3四半期を中心としたもので、天明の火災直前の遺物群である。

また、断面の観察から、1区の北東隅のみに分布している整地層を確認した。地表下約65cm(標高58.45m)で、2.5Y4/4(オリーブ褐色)粘土を厚さ10cmを貼り付けて整地したものである。上部を厚さ約10cmの焼土層が覆っている。江戸時代の整地層と思われるが、遺物は出土せず時期は不明である。この整地層から成立している遺構は検出していない。

焼土層は、火災後の整理層と考えられる。大宮御所は6度火災にあっているが18世紀第3四半期の土器を包含する土壌1を焼土層の下部で検出していることから、天明の火災による焼土である可能性が高い。最下層の砂礫層には、遺物は包含されていないため、時期は不明であるが、締まりが悪くて、地山とは考えがたく、近接地で2001年に実施した立会調査(周辺調査4)で検出した江戸時代前期の流れ堆積とされたものと同一のものと思われる。

掘削深度が浅く、立会の地点も限られたものであったが、調査地の周辺では江戸時代の遺構の密度はそれほど高くないと思われる。江戸時代前期のものと思われる砂礫堆積を切った中期の土壌2箇所しか検出できなかった。上部を覆っている焼土層は、天明の火災層の可能性があり、その上の堆積層も近現代だと考えられるからである。

圖 版

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょうさきょういちじょうしぼうきゅうちょうあと							
書名	平安京左京一条四坊九町跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2005-14							
編著者名	木下保明							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2006年3月24日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうさきょう 平安京左京 いちじょうしぼう 一条四坊 きゅうちょうあと 九町跡 くげまちいせき 公家町遺跡	きょうとしかみぎょうく 京都市上京区 きょうとぎょえん (きょう 京都御苑 (京 とおのみやごしよない) 都大宮御所内)	26100		35度 01分 10秒	135度 46分 05秒	2006年1月 6日～2006 年1月23日	200m ²	事務棟 整備工事
241								
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京左京 一条四坊 九町跡 公家町遺跡	都城跡 邸宅跡	平安時代 江戸時代	 土壌、整地層	輸入白磁、須恵器 土師器、土師質土器、 土製品、磁器、陶器、 銅製品、鉄製品、骨製 品、石製品、銭貨、棟 丸瓦、瓦				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2005-14

平安京左京一条四坊九町跡

発行日 2006年3月24日

編集発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 075-256-0961